

文化高知

'95年3月 NO.64



「『かぜのひと』のためのスケッチ」川崎太一

(財)高知市文化振興事業団

文化元年

橋本 大二郎

早いもので高知で四回目の春を迎えます。

就任以来、県政をより県民に開かれたものにしたという意気込みで夢中で突っ走ってきたという気がします。まさにあつという間の三年間でした。

この間、県政車座談議などで県民の皆さんと直接話し合ったり、県民のために働くという原点に立ち返るための県職員の意識改革への取り組みなどを通じて、県民の皆さんが県政の動きに関心を持ち、県政を身近なものに感じていただくという点では、一定の成果があったのではないかと思います。

今年さらには、昨年九月、県行政改革検討委員会からいただいた提言に添って、各分野の改革を着実に実行に移していきたいと考えています。その具体化のひとつとして、平成七年度には「文化環境部」という新しいセクションを知事部局に設置す

る予定です。

文化環境部では、これまで教育委員会が所管してきた文化行政に加え、人と地域の交流、県民の暮らし、景観や自然の保護、環境対策など関連の深い分野が連携しながら、「高知らしさ」あふれる文化の県づくりに取り組みます。

私は今年の年頭所感で平成七年を「文化元年」と位置付けました。

二十一世紀まであと五年、高知県が希望を持って新しい世紀に歩み出すために、最も重要なキーワードのひとつは「文化」であると思います。この新しい組織を要として「文化」を県政の中しっかりと定着させていきたいと思っています。

その場合、私は、さしあたり二つの視点が大切であると考えています。一つは、これまでのように「文化」という概念を芸術文化や文化財保護といった狭い範囲でとらえるのではなく、ハードからソフトまであらゆる

事業の中に文化的な視点を持ち込み、県庁の各セクションがそれぞれの方論を持って、総合行政として「文化」行政を押し進めていくということとです。

その一例は「木の文化県構想」でしょう。私たちは木の家に住み、日常ありふれた風景として山々を見てください。これまで森林とか林業というものを文化という切り口からとらえることは少なかったのではないのでしょうか。

林業が産業としての存亡の危機に直面している今、私たちの暮らしの中での人と木の長く深いかわり、あるいは差し迫った大きな課題である地球環境の保全といった視点からもう一度その価値を見直すところから、森林や木材産業の新たな可能性がひらけるのではないかと思います。

もう一つの大切な視点は、これまで文化は、ややもすれば経済の枠外のもの、ムダなもの、余ったお金の

使い道として考えられてきましたが、これからは文化そのものが経済的な価値を持つことができる時代、経済のサイクルの中に文化を組み込んでいける時代であるということです。

国でも採択していただいた「木の香るみちづくり事業」はその好例です。これまでは、新しい道路をつくるために緑の山肌を削り取られ、無粋なコンクリート擁壁が自然を分断してきました。これからは、地元で育てられた在来種の樹木の苗をおおわ

れた緑の森が復元できます。間伐材の利用の途もひらけ、ポット苗を育てる新たな産業も興ります。

二十一世紀はおそらく真にオリジナルなものが評価される時代になるでしょう。そこでは都市と田舎というこれまでの物理的ハンディやコンプレックスの図式はあまり意味がなくなるかも知れません。

それぞれの地域での自立的、主体的な取り組みの中で生み出されるオンリーワンの「文化」が高く売れる時代になるからです。都市から一方通行で「文化」を買う時代ではなくなるからです。

そういう時代に向かって県民が手を携えて歩み起す年、そういう意味で私は、平成七年を「文化元年」と呼ぶのです。

(高知県知事)

故郷・土佐を想う

高野 初子

故郷・土佐を想う時、あのどこまでも続く青い空と、肌を射るような夏の強い日差しを、まず懐かしく思い出します。それに、幼少期を過ごした安芸の野山で戯れた、真珠のようにキラキラ輝きながら流れるせせらぎを思い起こさずにはおられません。

子供のころ、長い休みに入ると、宿毛から浦ノ内、さらには琵琶湖畔の坂本へと飛んで行くのが、毎年の楽しみでした。そのころ、私の祖父・藤田昌世（昭和四十二年没）は琵琶湖で淡水真珠の養殖の研究を続けていました。

祖父は私を非常にかわいがってくれ、真珠の取引に行く時はいつも一緒でした。京都、大阪、神戸、御影……。祖父と訪れた先々での出来事が、走馬灯のように思い出されます。

そのころ、藤田の周囲には今日の

真珠業界の基礎を築いた人たちが、いつも集まっておりました。

「初子が男の子なら」というのが藤田の口癖で、そうした元老たちの話を聞いているうちに、私は一大決心をしました。「生涯、真珠の仕事貫こう」と。それが、今日の原点となっております。

今なお、東京、神戸、芦屋、京都、高知と行ったり来たりしている私は、あの一月十七日神戸を襲った大震災のショックは大きく、精神的に立ち直れないままです。五千人を優に超す犠牲者の中には、高知の出身者やゆかりの方も多しと思われ、尊い命を失われた方には心からお悔を申し上げます。被災された方には、一日も早く元の生活にお戻れになりますよう、お祈りいたします。

真珠のように、あの光り輝いているた、エキゾチックな国際都市・神戸——。神戸は古くから真珠の集積

地、世界への輸出基地でもあります。真珠関係の仕事に携わる八〇%の業界人が、神戸周辺に根付いております。

戦後の混乱期、食糧も衣服も住宅も乏しいころから、真珠は真っ先に輸出品として外貨を獲得してきました。それが日本の復興を早めたのは、歴史の証明するところでしょう。神



戸が希望をもって、あのころの元気を取り戻し、頑張らなくてはならないと思います。一日も早く、あの活気あふれる神戸にのみがえってほしいと、切に願っております。

奇しくも、この原稿を依頼された日が、一月十七日でした。

因縁とは申せ、災害と真珠の関係を考えると、土佐宿毛の千古未曾有の

大洪水を思い起こさずにはおられません。それは、子供のころから何度となく聞かされてきたからです。

土佐でも知る人は少ないかもしれませんが、今は亡き林有造、藤田昌世の努力によって真円真珠を完成させた宿毛湾は、日本の真円真珠の発祥の地であります。ところが大正九年八月十五日の大洪水が一瞬のうちに、宿毛真珠養殖場を壊滅させてしまったのです。あの洪水がなければ、真円真珠養殖の基礎を築いた土佐の宿毛湾は、伊勢の英慮湾、愛媛の宇和島のように世界にその名をはせていたに違いありません。まことに痛恨の極みであります。

数年前、林市長のお招きで桜の植樹に宿毛へ帰ったことがあります。その際、約三十年ぶりに宿毛湾の丸島を訪ねました。真珠養殖の基地であった丸島は、企業秘密が漏れないよう、当時はだれかれと訪れることができなかったようですが、今では立派な橋がかかっておりました。いつの日か、この丸島に「真円真珠養殖発祥の地」の記念碑を建立できれば、と考えております。

世界の美しき女性に愛され続けてきた真珠。この真珠こそ、土佐の生んだ最高の文化であると、私は信じております。

(高野パール代表取締役)

自然と共生する住まい

山本 恭弘

自然界は生物社会の多様なバランスの中で営まれている。だからその枠から抜け出して生活しようとする、生物社会のバランスは失われその生存基盤をゆるがすことになる。

住まいについていえば「自然の一部のような存在として自然と共に生きていく」ことがバランス状態を保っていることのように思われる。住まいは資源とエネルギーを大量に消費しなければ成り立たない宿命をもつだけに、自然への負荷を軽減する方法を模索しなければならない。

私が一九七五年に設計事務所を開設した当時、建築の設計思想は自然との闘いであり、より快適な空間の獲得をめざすことでした。建築業界全体の空気も概ねそのようでした。

それから十年後、こうした設計思想を逆転させられるまさに青天の霹靂といった仕事に出合うことになりました。それは、当時桜馬場にあった

事務所二人連れのご婦人が訪ねてこられ住宅の設計を依頼して下さいました。築後六十年くらいの住宅で現在使っていない台所と食堂の回りを改装したいというもので、そのための設計者を捜している。私にたどり着いた旨の話を伺いました。

それから数日後に味わうカルチャーショックに気付くはずもなく、こうした増改築の仕事の話に淡々と対応していたことが申し訳なく思い出されます。話は進み、所在地が私の出身地土佐山田町にあって、子供の頃には祭の寄付をもらいにいったこともある。二学年先輩の家だとわかり、ご縁を感じてお引き受けしたことでした。

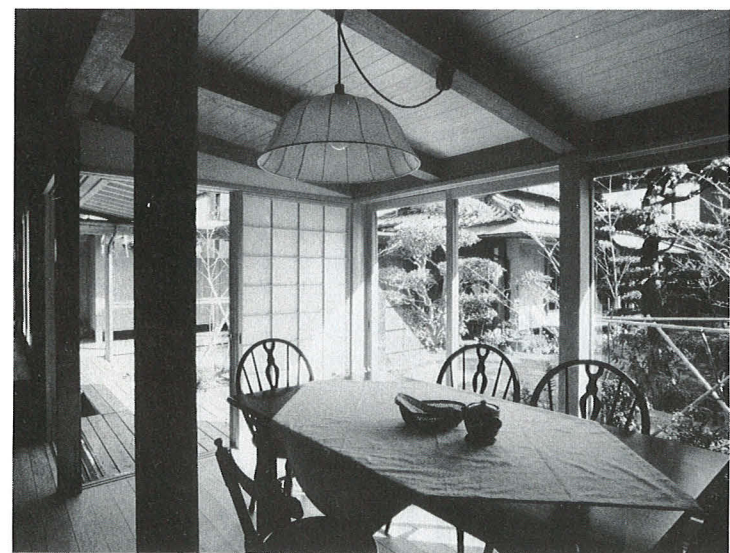
後に雑誌「家庭画報」でこの仕事に掲載され反響をいただきましたが、改築以前の建物も立派な門構えで随所に素晴らしい職人技がうかがえる

風格の漂った旧家でしたが、それにもまして家人の住まいかたは目を見張るものでした。田の字型の座敷をもつ母屋、五右衛門風呂、庭をはさんで二間続きの離れ、伝統的な佇まいがそのまま生活の中で自由に生かされ展開する、趣味の良い家具や生活の器、全体を支配するつましやかな空間、すべては控えて自然のありようにさらわらず受け止めていた。その情景は完璧に見えました。

この空間に手を加えるのだから恐ろしいことでした。しかし、空間の機嫌をうかがいながら進める設計の作業は同時に新たな建築思想の胎動を感じさせ始めていました。

この仕事の四年後、日本住宅木材技術センター主催の「木造住宅デザインコンクール」が作品を募集していたのを幸いに、これまでの成果を問うつもりで自宅をモデルに改築案（木造文化継承）をまとめて応募、最優秀賞建設大臣賞を得て確信を深めることができました。

佐山田町）に使っています。



庭に向けて大きく開口を取った食堂 古い部分と新しい部分の融合

こうした仕事から得たものは「木」への一層確信に満ちた評価です。「木」の住まいは増改築によって空間を自由に調整できます。傷んだ部材は交換もできるし、テクスチャーも優しい。燃えるという欠点はあるが、強度は強い、地震や台風にも伝統的な大工の技術が生かされて

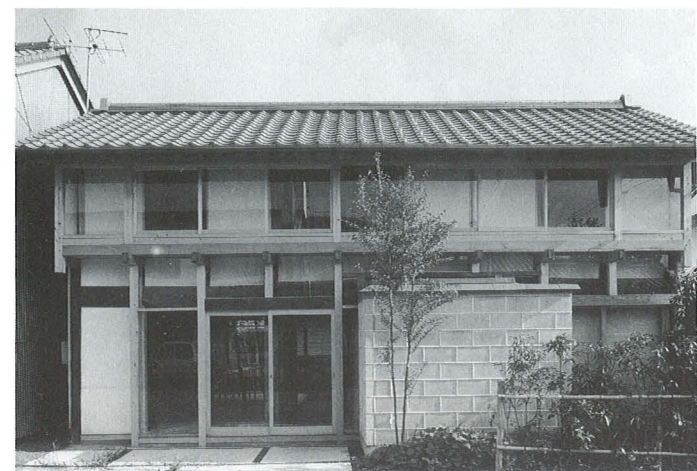
いれば倒れることはない（阪神大震災でも倒壊をまぬがれていた）。そして樹令をこえて建つことで循環のサイクルができあがり環境への負荷も小さくなる。

「木」は人間に身近な素材であり、それ故に大切にもされ、また無駄にもされてきたがこうした全てが「木と人間」を結ぶ文化です。そして「木」は人間にとって常にプラスのイメージで働きかけてきます。人間は言葉の発生する「原始状態」の記

憶を誰もが共有してきて、そうした記憶が勝手に甦ってきて人の心を動かす、人間はそのようにできているらしいのです。現在人間から植物までが共通の遺伝子(DNA)で繋がっていることが確認されているが、こうした生命の連鎖が記憶を甦らせて「木」をプラスのイメージとして運んでくるものと考えられます。

一方、人間にとって「木」は、いや緑や森林は、かつて手強い敵でもありました。人類が最初に住みついていたのは森林ではなくて海岸や河川ぞいであり、文明は森を破壊して発展していったことは歴史でも知られていることです。

しかしそんな中で唯一森を残しながら文明国として発展してきたのが日本です。そして森が残ったことが日本文化を育む大きな母体となったのです。梅原猛は、森が残った理由を二つあげて説明しています。一つは弥生時代Ⅱ農業国としては後進国、そして米農業であったことです。米農業は小麦農業ほどには平地を必要としなかったため森の破壊が少なくすみ、破



北側の前面道路側外観
既存の軸組みをガラスのファサードで覆っている

壊の量の少なかつた分だけ森が残った。もう一つは縄文時代Ⅱ主に宗教的色彩に関係します。縄文の社会は自然崇拜(アニミズム)の考えが支配していて「木」に対してもその生命力に驚き、食糧としての木の実に感謝していたわけで土器の表面に植物を写したりして信仰心を代弁させていたといわれます。そこでは人間も特別な存在ではなくて、他の動物や植物と一体であって共生している社会として認識されていたことです。こういった事象が継承され、森が残り「木と人間」の文化が育まれていったと考えられます。



の下では必然的に木造建築が生まれ、今日に繋がってきました。大局的に見れば、木造建築は自然の造形ともいえるし、自然の一部ともいえるでしょう。

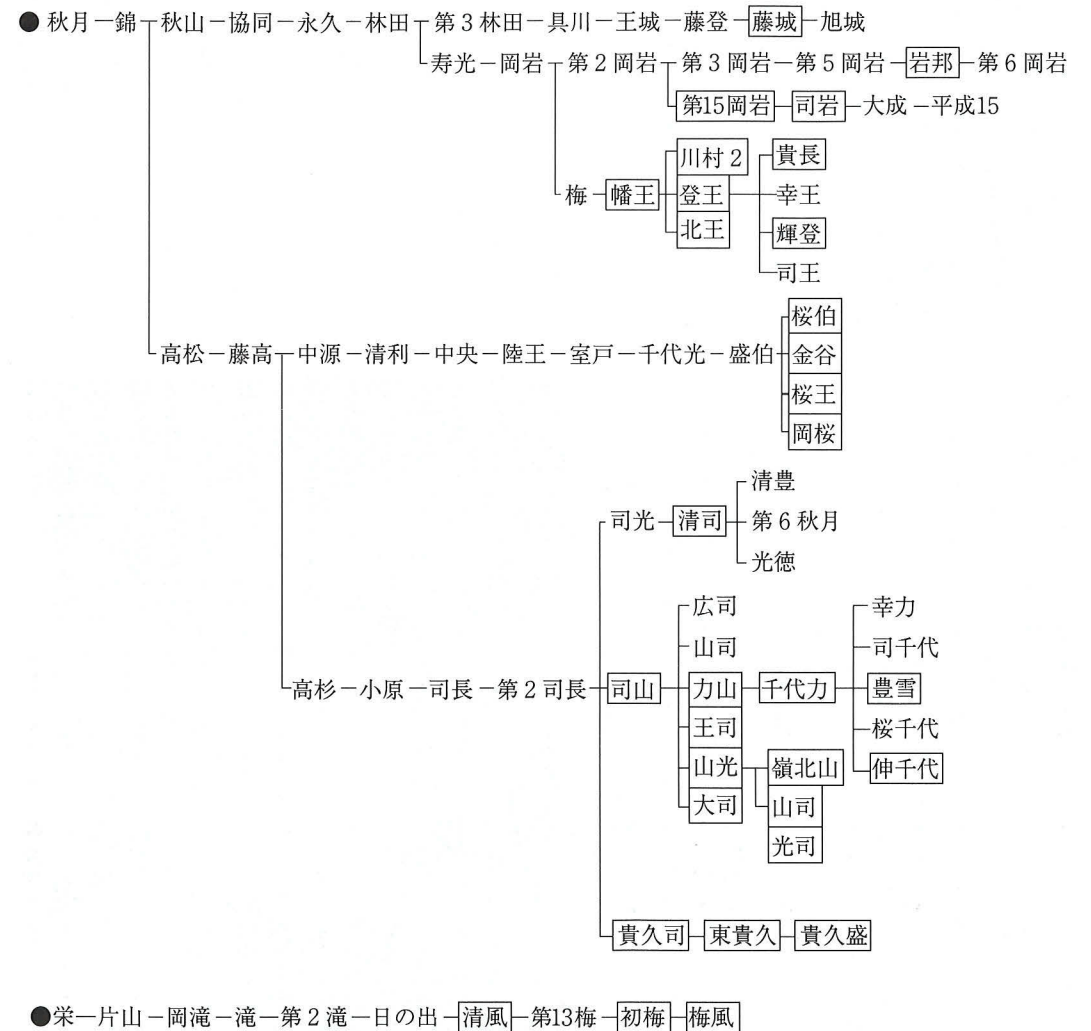
しかし、建物には寿命があります。役割を終えた建物から我々建築家は継承すべきものを評価し後世へ伝えなければなりません。そして新しく生まれ育ってくる建物を提案しなければなりません。私は「百年耐えられる基本の骨格をもち、流動する価値感の中でより適した居住空間を求めて増改築を繰り返す」、そんな増改築のしやすい家を提案しています。

(聖建築研究所)

土佐の褐牛 (アカウシ) その3

町田 隆彦

【土佐褐牛の主要な系統】



第1図



土佐褐牛の脂肪交雑

長年にわたる土佐褐牛の計画交配により産肉能力における肉量、肉質ともに優れた血統ならびに個体の育種選抜に努力しているが、第1図の□に囲んだ各種雄牛が土佐褐牛の改良に貢献している。とくに肉量系では、力山、千代力号が、肉質系では司山、山光、貴久司、東貴久号が実績を上げている。

【土佐褐牛肉の味】

和牛肉の独特の芳香、風味、舌触りは脂肪に起因することが多い。したがって、脂肪交雑(霜降り、サシ)が十分に均一に分布していることが味に影響し価格を大きく左右する。肉の色も脂肪の浮いたようなやや淡目の艶のある鮮紅色で、脂肪の質も

適度にねばりのある淡クリーム色が美味である。脂肪が真っ白なものを見た目は美しいが質は硬く風味に乏しいものが多い。

土佐褐牛肉の特徴は無駄な皮下並びに筋肉間脂肪が少なく可食割合が多い。また肉質における脂肪交雑は過剰ではないが細かい小ザシが適当に入っている特徴をもっている。見た目はハデなサシではないが食べるとうまいとの評判が多い。価格形成の基準になつて現在の枝肉格付け評価は黒毛牛を基準とした見ただけの評価であり、食べてうまいかまづいかではないので地味な土佐牛は価格的に不利を被ることが多い。しかし赤肉割合が多く可食歩留まりが高く適切な脂肪交雑をもつ土佐牛はこれからの消費者の嗜好に適合した特徴をもっている。

【肉の見分け方と保存】

①肉の見分け方

★肉の色をまず見る。鮮紅色(動脈血色)で光沢のあること。筋肉色素のミオグロビンが酸化して鮮やかになる。濃赤色は雄、老齢、発熱、疲労、ストレス、運動する筋肉などで硬い肉が多い。淡赤色は若齢で柔らかいが水分が多く風味に乏しくて淡泊。

★脂肪が肉のうまみを左右する。肉のとりけるような舌触り・芳香・うま

まみは、粘りと光沢のある乳白色の脂肪(脂肪交雑、霜降り、サシ)が左右する。

★筋肉のキメが細かいものが上質。筋繊維や筋束が細かくピロッドのように滑らかで締まっているものが肉質が上等。ヒレ、ロースなど体の中心に近い部分が細かい。雄や運動をよくする筋肉は粗い。

★肉の硬さと柔らかさ。歯切れが良くて柔らかく、キメが細かく風味の良いものが最上。良い肉は煮過ぎず焼き過ぎずに食べると美味である。逆に筋束間の結合組織が厚く硬い肉は長時間煮込むとおしく食べられる。

②肉の保存

水分含量の多い鶏肉が最も日持ちが悪く、次いで馬肉、羊肉、豚肉の順になり脂肪の多い牛肉が最も日持ちが良い。また、空気に触れる面積の多いひき肉は日持ちが悪く買った当日調理するほうが良く、スライス肉がこれに次ぎ、ブロック肉が長持ちがする。

(a) 冷蔵・冷蔵庫の下段で五度C以下でラップで包み密封容器で保存し肉の酸化を遅らせ雑菌の防止、水分の蒸発を防ぎ風味を逃さないようにする。家庭冷蔵庫では牛肉三〜七日、豚肉で二〜四日が保存期間。

(b) 冷凍・冷凍保存の適温はマイナス三〇度Cであるが、家庭用冷蔵庫

庫はマイナス一〇度Cであるので肉の芯まで冷えるのに時間がかかり変色や味が変わりやすい。冷凍しても酸化が進み水分が蒸発して風味が落ちる。密封することが必要。家庭用冷蔵庫では一カ月が限度。急速冷凍すると肉汁が流れ出て風味を損なうので緩慢冷凍をする。また再冷凍すると著しくまざるので一回分を分けて冷凍保存。できるだけ調理したものを凍結。最初から冷凍保存する場合は市販の冷凍肉を購入する。市販の冷凍肉はマイナス三〇度Cで急速冷凍してあるので家庭で冷凍したものよりも長持ちする。マイナス一八度Cで密封保存できれば牛肉で約一年、豚肉で半年近く保存できる。

(c) 塩蔵・肉重量の二〇%の塩に脂肪を付けたまま保存、食べる時は二%の塩水に一晩漬けて塩抜きをする。

(d) 味噌漬け・肉の一〇〜二〇%の味噌をまんべんなく擦り込んでビニール袋で空気を抜いて保存。食べるときはある程度味噌を除き焼いて食べる。

(e) ワイン漬け・牛肉一kgに塩、胡椒して白ワイン、ワインピネガー、タマネギ、セロリ、ニンジンなどを千切りして載せ冷蔵庫で五〜六日寝かせてから食べる。

(高知大学名誉教授)

ソフトウェア

文化論 上



中谷 正彦

表記のタイトルを与えられたのは、コンピュータといえばソフトウェアということ、昭和四十三年からの業界に身を置く私にとっては、いささかでも書きやすいテーマと考えられたからであろうか。しかし一介の技術屋社長に過ぎない私には、文化を語るような知性は持ち合わせていないことは誰よりも私自身がよく知っている。ただ、ソフトウェアが好きで、この世界で生きていくことによりいささかなりとも世のお役に

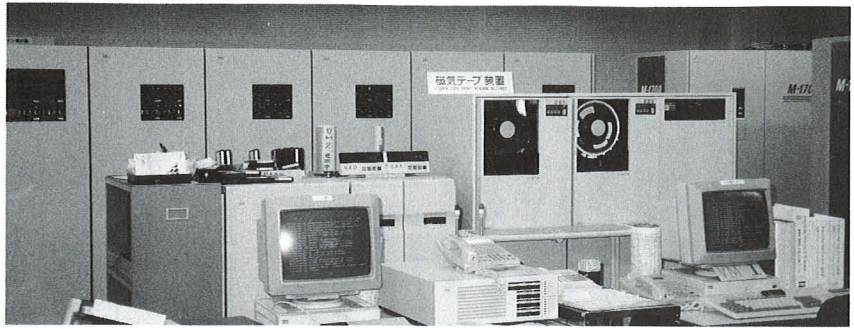
立ちたいと考えてきた者として、また一人の人間として、このテーマに取り組むのも一つの義務ではないかと、身のほども知らず、キーボードをたたかせていただくことにする。

『広辞苑』によると、文化の定義の一つに「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住をはじめ技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容とを含む」とあり、また、より物質的な側面を文明といい、精神的

な側面を文化というともある。一方ソフトウェアという用語は、ハードウェアであるコンピュータという機械装置にコンピュータ用の言語を使用することにより、所期の目的に向かって一定の結果をアウトプットさせるに必要なシステム設計・プログラミング等、一連のシステムのノウハウを施したものを総称するものとして使われている。余談めくが、ソフトウェアという言葉は、当社を設立した昭和四十七年当時はまだ日本語として認知されておらず、公証人の先生に四苦八苦内容を説明した結果、「電子計算機の利用技術」と表現することで決着した。当社の定款上の事業目的は今もこのままの表現である。

さて、コンピュータのソフトウェアとしては、かような意味でとらえてもさして支障はないとしても、文化という言葉に冠するソフトウェアとなることより広義なものとして定義づける必要がある。今に至るも日本語としてのこの言葉の意味は今一つ分かったような分らないような、それだけにどんな意味でも包含させようとすればできるような、どんな場面でも使用することができる非常に便利な言葉であるともいえる。したがって、私の独断をお許しいただければ、「人類社会の、ひいては地球

球全体の幸せを根底の価値観とするシステム化された知性」とでも解したい。今、二十一世紀を目前にするこの時代において、何千年かの人類の歴史が一つの大きな転換期を迎えているということが最近とみにささやかれる。現在地球上に発生している様々な問題、ざっと拾いあげただけでも地球の温暖化・オゾン層の破壊・公害・人口増加・飢餓・地域紛争・核問題・尊厳死・遺伝子操作など枚挙にいとまがないわけで、今や人類が、人類のみことだけを考える時代から、地球全体、ひいては宇宙のシステムまで考慮にいられた価値観を確立すべき時に来ていると考えざるを得ない。よく知られるマズローの欲求五段階によると、第一段階の生理的欲求、第二段の安全の欲求、第三の安定の欲求、第四の社会的欲求、そして第五の自己実現の欲求と、人はその文明・文化の進歩と共により高次元の欲求を求めめるものであり、ひとり人間のみが第五段階の欲求を持つものであるという。そしてここにこそ知的生命体としての人類が、他の動物と異なる点であるといわれる。ただ、この欲求を実現したとして人生を終えた人がただ存在したかかは分からないが、それが比較的に狭い範囲での自己充足感にとどまるのではなく、これからの自己実現と



は地球環境全体との調和という、過去の思考対象の範囲から一歩も二歩も踏み出し、我々の精神的レベルも数段アップした次元に移行させるべき時であると、強く主張される人も少なくない。

かつて、ガンジーは「人類の七つの大罪」として、人格なき知識・人間性なき科学・道徳なき商業・労働なき富・理念なき政治・献身なき祈り・良心なき娯楽を揚げ、我々人類に警告を發した。もちろん、これに類することは、さまざまな宗教家や哲学者、知識人といわれの人達から過去何度も繰り返し述べられていることでもある。今や、これらを人類の英知でどのレベルまで、我々自身が世の中のさまざまなシステムの中で現実化できるかということが問われる時期にきているのである。自然科学の分野でも最新の宇宙物理学、量子力学等の発展はすばらしいものがあり、また昨年NHKテレビで臨死体験や、ナノの世界の特集が組まれ、大きな反響をよんだ。その要因は、とどのつまり、科学の発展はすばらしいものがあるが、現実にはまだまだ人類にとって不可知なものがあまりに多いという、よく考えればまったく当然のことが再認識させられたことにあるのではないか。したがって、我々が今なし得るのは、人類が営々として築いてきた文明がどの

の場面で人類に幸せをもたらし、どの場面で不幸をもたらしたのかを総点検し、この結果をフィードバックさせることであるといえる。我々の文化・文明を基礎づけてきた自然・人文・社会の各分野の科学、そしてこれらを基に実用化された技術・ノ

ウハウの進歩は、個々にとらえればまことにすばらしいものであり、例えば国家体制でいうと、自由主義・民主主義という恩恵をこうむって日々の生活を営む現代の人間は、少なくとも封建時代よりは総体的に大変恵まれた環境にあることはいうまでもない。しかし、現在の地球上の種々の問題は、えてして文明が文化をリードしてきた結果であるともいえる。あえてこじつけて文明をハードウェアとしてとらえれば、文化はソフトウェアであり、今後の歴史は、ソフトウェアに裏づけられたソフトウェアがハードウェアをリードしていく精神構造を基底として、世の中のさまざまなシステムづくりに取り組まなければならないのではないかと。よくいわれるように、ソフトがなければコンピュータというハードはただの箱、しかしこの箱がなければソフトウェアもまた無用の長物となる。いずれも重要ではあるが、ソフトウェア文化といった場合には、特にそこに「ソフトウェアの優越性」という一つの原理を確立すべきではないかと、考える。以上、抽象的表現に終始したが、これを総論ならぬ総論として、次回により身近なテーマとからめて各論に入らせていただきたい。

（パシフィックソフトウェア）
開発代表取締役

| | | | | | | | |
|---|---|---|--|--|---------------------------------------|---|-------------------------------------|
| 高知市文化振興事業団編 高知のエスプリ 定価一、二〇〇円 | 高知市文化振興事業団編 高知の文化を考える会編 定価一、二〇〇円 | 岡林清水著 高知の文化を語る 定価一、二〇〇円 | 岡林清水著 高知の文化を語る 定価一、二〇〇円 | 高知市文化振興事業団編 わがまち百景 定価一、二〇〇円 | 簡井広道著 画帳の歲月 定価一、二〇〇円 | 土居重俊・浜田教義編 高知県方言辞典 定価一、二〇〇円 | 高木啓夫著 土佐の芸能 定価一、二〇〇円 |
| 山本 大著 幕末の青春 坂本龍馬の生涯 定価一、二〇〇円 | 依光 裕編著 珍聞土佐物語 上下巻 定価一、六〇〇円 | 鈴木文雄・井本正人・岡根猪一郎著 協同組合と地域づくり 定価一、〇〇〇円 | 清遠幸男著（高知レポート） 高知県の工業 定価一、〇〇〇円 | 外崎光広著 土佐自由民権運動史 定価一、八〇〇円 | 外崎光広著 土佐自由民権資料集 定価一、〇九〇円 | 今井嘉彦著（高知レポート） 河川はよみがえるか 定価一、〇三〇円 | 岡林清水著 高知県文学散歩 定価一、八〇〇円 |
| 高知市文化振興事業団編 高知のエスプリ 定価一、二〇〇円 | 高知市文化振興事業団編 高知の文化を考える会編 定価一、二〇〇円 | 岡林清水著 高知の文化を語る 定価一、二〇〇円 | 岡林清水著 高知の文化を語る 定価一、二〇〇円 | 高知市文化振興事業団編 わがまち百景 定価一、二〇〇円 | 簡井広道著 画帳の歲月 定価一、二〇〇円 | 土居重俊・浜田教義編 高知県方言辞典 定価一、二〇〇円 | 高木啓夫著 土佐の芸能 定価一、二〇〇円 |

ジュウリーはあなた自身

靄田 和子



「こんな素敵なプローチを作る人はどんな人か会いとうて、押しかけてきましたぞね」拙い私の作品を手を柔らかな顔をほころばせながら、F先生が我が家においで下さったのがついこの間のように思われます。作品発表の場もないままに、当時旭町で兄の開いていた陶器店の片隅に数点のジュウリーを並べていたのを見つけて下さったのです。振り返ればそれはもう二十数年も昔のこと、いい方々との出逢いに恵まれて、何とか仕事が続けてこられたのだとありがたい思いでいっぱいになります。

伊丹の叔父の家に居候してジュウリーを学ばせてもらった日々。「好きなように作って下さい」といつも石を預けて下さったNさん、Yさん、Tさん、Mさん。どんなに不遇の時でも少しも変わらさず、さりげなく援助の手をさしのべてくれた友人たち。そして今も、ジ

す。

何年前になるでしょう。朝、我が家の台所の窓を開けた時に見た光景。ジロジロ見ては失礼と思いながら「みんな何してるのかしら？」が、始まったのです。早速、お隣りへ……。

それが木彫りを始めた、きっかけです。気に入るまで何度でもやり直しが可能ということは(もちろん腕の未熟さゆえ)気移りの激しい私の気性にピッタリでした。当時はブルーな日もピンクの日も飽きもせず彫刻刀を手にしました。しかし木彫りがそれらしくなるにつれ、こんなに苦労して手間隙かけてどうしてもっと奇麗にならないものかと自分の技量を棚にあげ不満を抱きはじめてのです。少しづつでも技術が向上したのは、やはり師と尊敬する方に出会えたからでしょう。高知大学勤務で高知へ赴任したばかりの伝統工芸作家である加藤寛先生(現在は東京国立博物館でご活躍中です)。私の好奇心に根気よくお付き合い下さいました。

何の知識もなく、ただ美しいものに憧れ恐いもの知らずで飛び込んだ私に、惜しみなくご自分の知識を授けて下さったのです。おっちょこちょいでよく叱られはしたものの、自由な発想を封じ込めるのでもなく、突拍子もないアイデアにも耳を傾けて下さったのです。木彫りの仕上げも初めのうちは簡単な洋塗装で十分満足していましたが、後日、先生の仕事を拝見する機を得、作品を見せていた

ユウリーが好きで決して恵まれた待遇ではないのに頑張ってくれているスタッフ。数え上げればきりがありません。

文学部を卒業して国語教師をしていた私がなぜジュウリーデザイナーにと、さまざまにドラマを期待して下さるむきも多いのですが、もともと美大受験に失敗して俳文学をやっていたので、やりたいことをするのが人生だと念じているうち自然にたどり着いたのがジュウリー制作だという気がいたします。

大学では蕪村研究の大家で、蕪村の俳諧と絵画に造詣の深いS先生に出逢えましたので結構学ぶことの多い学生生活でした。

ジュウリーに転ずるにあたっては、今と違って学ぶ場がとて少なかつた時代です。少々苦労もいたしました。わずかの銀屑を溶かし、二日かかりで小さなリングが作れた時の嬉しさは今も忘れられません。

数年後高知に帰り、新聞に「彫金教室」とたつた一行の広告を出して私の仕事は始まりました。

自分自身がやりたくてやりたくてたまらなかつたことなので、一度に二、三人しか入れない小さな仕事を眺めながら、希望者がいっぱいいて入れなかつたらどうしよう、と心配したのですが、何と最初の月は一人。次の月に一人といった具合で、狭い教室の心配は杞憂に終わりました。それでも七四年にはとでん西武で、二十七名と少ないながら本当に創作することの大好きなメンバーたちと「まだまだ未熟な作品展」を開かせていただき、

だき、何度かお話を伺ううちに、漆特有のかわぶれなど物ともせず大胆にも自分の作品に自分で漆塗りを試してみたのです。平滑な塗り面への通常の漆工技術と異なり、木彫りの塗装は、彫刻を損なわずに、忠実に彫りの味を生かすものでなくてはならないので、工程の各所に独特の工夫を必要としました。

それ以来漆塗りの素晴らしさ、蒔絵や螺鈿等による加飾の美しさに、好奇心は次から次へと膨らみ、ついに待望の個展を西武美術画廊で開催することになったのです。榕(とんぼ)会

四人展。この時は自分でも驚くほど今までになく急ピッチで作品を創りあげました。木彫りに少し手を加えるだけのことといつても、拭き漆で仕上げるもの、漆絵で加飾するもの、平蒔絵、高蒔絵、研ぎ出し蒔絵、沈金、蒔醬。すべて新しいこと、尽め、ひたすら挑戦するしかありませんでした。

同じ拭き漆にしても素材のもつ良さを生かすためには微妙な工夫と技術が要求され、しつとりと明るい調子に仕上げるためにはどうすればよいのか、深い重みのある色調に仕上げるためにはどうすればよいのか、と、この時、改めて技術を学ぶ難しさを思い知ったのです。

あれからすでに八年……。先輩諸氏の温かい輪に包まれて、自分の無鉄砲さに時々身震いしながらも相変わらず好奇心と仲良くしている私です。

(漆芸家)

以後九回まで回を重ねました。七八年に自宅でささやかなジュウリーショップを開店、お客様と直接話し合せて作らせていただく体制をつくり、九一年秋からは龍馬生誕地の今の場所です。夜はいつも制作の日々を過ごしています。

ジュウリーはあくまで着けて下さる方が主役であることを忘れず、これからのいい作品を創りたいと念じています。

アトリエ金の槌代表
(社)日本ジュウリーデザイナー協会会員

好奇心

楠本はるみ



「好奇心の塊が服を着て歩いている」私のことを家族はそう言います。

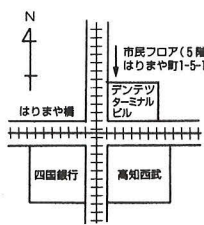
言われてみると他の人より日常の会話に、何?どうして?等、疑問符が確かに多いので

市民フロアの「利用を

展示や会議に最適!

広さ・内装 96㎡壁面布クロス張り、スポットライト完備

所在地 高知市はりまや町一151-1
デンテツターミナルビル5F



お申し込み
(財)高知市文化振興
事業団
731-4365

賛助会員募集中!!

- 年会費 年2,000円
- ① 機関紙「文化高知」を年6回お手元にお届けします。
 - ② 事業団発行の出版物の10%割引(一部例外あり)
 - ③ 主催事業や刊行物の案内(マスコミ利用の場合あり)
- [※上記特典は申し込みいただいた日から1カ年有効]
- お申し込み ①郵便振替 ②現金書留 ③直接事業団へ…
いずれの方法でもけっこうです。

星の下の出会い

—「詩と版画の出会い展」の周辺—

坂本 稔

夏の手紙

—日和崎尊夫に—

燃える七月のまひるの空の下
冷たい梅酒で乾杯して

別れた

君は

若きアラブゲリラさながらのかつこ
うで

青いサングラスが妙に哀しかった

あれからもう一月もたったらしい

今夜ひとり

ジンなどガブ飲みしながら

君のことを考えている

外の

風もない泥のような闇の中で

一匹だけコオロギが鳴いている

その声が

真っ白に聞こえる

物部川のほとり

あの酒は

ふつふつとうまかったなあ

東京へは行かないよ
おぬし 死ぬなよ

この詩は、昭和五十一年夏の作で、「南方手帖・第十九集」に発表したものである。その日、東京に帰る日和崎尊夫を空港まで送っていった折の少々複雑な思いを一篇にまとめ上げたものである。

いつも危うい人であった。版画を彫っても酒を飲んでも、いつも命懸けの人であった。それだけに、彼と付き合う方もいろいろと気骨が折れることであった。

その日も、タラップに立ち、こちらを向いて手を振る彼の姿全体から、いつ死んでしまうか分からない……という危うさが、見えない光のように放射していたのを、今も私ははつきりとおぼえている。

☆

そんな彼と初めて出会ったのは、昭和四十年の早春であった。今からちょうど三十年前のことである。細工町の町角にその頃開店したばかり

の喫茶店「セザンヌ」は、芸術全般にわたって理解のあるマダムと、その洒落た店構えや豊富なレパートリーのレコード演奏などの魅力で、詩人や画家、音楽愛好家たちの心を捉え、いつの間にかその仲間たちのかっこうのたまり場となっていた。

日和崎尊夫との出会いもこの店の黒いデコラ張りのカウンターでのことであった。やや小柄ながらひきしまった体つきの眼光鋭き美男子であった。

ちょうどその頃、私は個人誌「南方手帖」を創刊し、詩人のみならず作家や画家にもその紙面を提供して、ささやかながら新しい文化活動の展開を目指して歩み始めたばかりの時期であった。例えばその第六集には、詩や評論と肩を並べて、今や古典的名作ともいえるであろう高崎元尚氏の「装置」という革命的な前衛芸術作品の写真と作家自身のコメントが掲載されている。やがて、日和崎尊夫の新鮮で幻想的な版画が表紙を飾るようになったのも、「南方手帖」の自由で開放的な発行方針から見れば、至極当然の成り行きでもあったと言えよう。竹内蒼空氏の見事な題字と日和崎の版画で表紙を飾り、山川禎彦氏の評論や八波直則氏の訳詩など、今思えば実に豪華な執筆メンバーに恵まれていたものであるが、

なかなかの好評であった。

一方、平岡氏のそうした情熱があちこちに熱波のように伝わったのか、生前の日和さんを知る人たちが、作品や資料などを続々と岡の上のギャラリーに持ち込みはじめ、あれよあれよという間に百点を越す展示物が集まってしまったのである。個人が動いただけでなく高知版画協会(坂上貞宣代表)も全面的に協力。会員版画家・徳広秀光、山中雅史、堀川精二氏らが作品の提供はもとよりその整理と飾り付けを、時には泊まり込みまでして行ってくくださったのである。

そんなある日、休憩の一時に、平岡さんが「日和さんがわたしたちを呼び集めてやらしゅうみたい……」と笑顔を見せると、ちょうど個展開催中の玉造義隆氏が「ほんと、日和さんの魂がほくらをここへ……」とわずく。私は私であれこれの回想に追われる。……星ヶ岡で「星と舟の唄」、日和さんの長男が私の命名で「星児」、そういえば、彼が「南方手帖」に発表した詩のテーマがやはり星、木口木版の処女作が「食星帯のかたち」……私は、日和崎尊夫との出会いからの三十年という歳月を黙約の如くに「星」の光が貫いていることに新たな感動を覚えるのであった。

そのすべてが「セザンヌ」の常連であった。こうした雰囲気の中で、日和崎との記念すべき出会いから一年の後、ふたりの詩画集『星と舟の唄』が誕生する。私の詩の原稿を読んだ日和崎が、短期間のうちに彫り上げた試作品を見た「セザンヌ」の常連は、等しくその出来栄に感嘆の声を上げたものである。日和さんは上機嫌であった。やがて本格的に製本の段階に入り、日和さんの要請で「セザンヌ」のマダムや若い画家の卵らと一緒に、その頃小石木町にあった彼のアトリエへ仕事の手伝いに通ったものである。そんなある日、私と二人で徹夜の仕事の後、今は撤去されてしまった沈下橋から素っ裸になつて鏡川に飛び込み、水の掛け合いなどして遊んだことがある。その時、ふと見上げた明け方の東の空に輝いていた天狼星(シリウス)の青い光を今も忘れることができない。

☆

さて、時は流れて三十年。今年の一月に高知市は横内の小高い岡の上に新しくオープンしたギャラリー「星ヶ岡アートヴィレッジ」で「詩と版画の出会い展—日和崎尊夫十坂本稔詩画集『星と舟の唄』をめぐって——」が開催された。

この展覧会開催のきっかけは、去年の晩秋のある日、私がふらりと訪

冬の手紙

—日和崎尊夫の霊に—

平成四年は初夏に
君は死んだ

ぼくは

お通夜にも葬儀にも行かなかった

一年ほどの後

とある集いで

僕は「夏の手紙」を朗読した

……おぬし 死ぬなよ と

この時が

ぼくだけの君の葬礼の時であった

平成七年の冬

ここ星ヶ岡に

君は天より舞い降りて来た

オーナーのHさんが言う

「日和さんがわたしたちを呼び集めた……」

画家のTさんが言う

「日和さんの霊がここにぼくたちを……」

そう

君は見事に復活したのだ

君とぼくの暗黙の合言葉

「星」の降る岡に

おぬし もう死ぬなよ

(日本詩人クラブ会員)

れたこのギャラリーで、オーナーの平岡望氏と出会ったことに根差している。平岡氏は日和崎尊夫の中学校時代の二年後輩に当たり、自らも絵筆を握り、早くも十代で高知県展の特選(選者・鳥海青児)を取り、その後、アメリカ、ヨーロッパで絵画修行を重ねた経験もある人で、日和崎尊夫の才能をその初期の頃から尊敬し、その人間性にもぞっこんほれこんでいた人である。その平岡氏が新しいギャラリー開設の夢を抱き始めたのは数十年前にさかのぼる。そして、いよいよ実現の見通しがつき始めた今から八年前頃には、星ヶ岡アートヴィレッジのオープン記念の展覧会は、絶対に日和崎尊夫先輩にお願いしよう……と固く決めておられたのである。しかも、その構想については、日和崎尊夫本人には一言も漏らさず、事が本決まりになった時点で突然本人に告げて彼を驚かせ、かつ、喜ばせることを最高の楽しみとして来られたのである。

だが、天は無情なるかな、後輩のそういう珠玉の心と熱い思いを知ることもなく、わが国版画家の鬼才、日和崎尊夫は、嵐のように壮絶な生きざまと精緻極まりない傑作の数々を残してこの世を去ってしまったのである。時に、平成は四年の初夏であった。平岡さんの落胆ぶりは察す

るに余りあるものがある。このような極めて感動的な平岡氏の話聞いた翌日、私は、この三十年に近い歳月を書斎の片隅に眠りかけていた日和崎尊夫との詩画集『星と舟の唄』を星ヶ岡に持参した。氏は一覧するなり「これをここで展示しましょう」と言い放ったのである。平岡さんの眼には妖しい光がみまぎっていた。

☆

初めの話し合いでは、平岡さんが自分の個室としてこしらえた地下の小さな部屋で……ということであった。ところが次の日には「先生、メインでやりましょう、メインで……」、と、氏はえらく勢い込んでいるではないか。それは面白いが、今から準備にかかって、予定の一月早々からの観展に合うのかな……と、危ぶむ間もなく、平岡さんは、「これから町へ日和さんの作品を借り出しに行きましょう」と立ち上がるのであった。

それからの毎日は、行動力の権化みたいな氏のお供をして、日和崎作品の所蔵者のお宅を回ったり、プロカメラマンの中村信也氏を伴って日和さんがよく通っていた(荒らしまわった)喫茶店や酒亭を訪ね歩いたのである。ちなみに中村氏の写真作品は会期中地下の展示室に飾られ、

苦悩する現代山村 (4)

大野 晃

わが国の山村は、戦後、燃料革命後の山をどう活用するかという対応に迫られたが、高知の山村においては、この対応に「二つの道」を見出すことができる。

その一つは、国の植林政策にそつたもので、薪や炭の原木となつていた雑木林を切り払い、スギ、ヒノキなどの針葉樹を八割植林し、クヌギ、ナラなどの広葉樹を二割残すような山の長伐期活用の道である。こうした道を行ってきた山村を私は「スギ・ヒノキの人工林型山村」と呼んでいる。これに対し、もう一つはスギ、ヒノキの植林をおさえ、クヌギ、ナラなどの広葉樹をできるだけ残し、炭を焼き、栗を栽培し、椎茸生産などで日々の現金収入を得る山の短伐期活用の道である。こうした道を切り拓いてきた山村を「クヌギ・ナラの雑木林型山村」と呼んでいる。

スギ・ヒノキの人工林型山村は、人口・戸数の激減と高齢化の急速な進行に加え、限界集落が増加してきているところに大きな特徴がある。クヌギ・ナラの雑木林型山村は、人口・戸数の減少や高齢化の進行もゆるやかで、しかも限界集落は皆無である。このように、この二つの型の山村はきわめて対照的な動きを示している(表参照)。

表に示されるように、人口減少率、高齢化率が県下でトップクラスの池川町、物部村、大豊町、仁淀村などはスギ・ヒノキの人工林型山村の典型的な自治体である。では、こうしたスギ・ヒノキの人工林型山村では、なぜ人口・戸数の激減、高齢化の急速な進行、限界集落の増加が起こってきたのであろうか。その背景には、戦後わが国がとってきた林業政策の矛盾があること

を指摘せざるを得ない。周知のようにわが国では、戦後の「拡大一斉造林」によってスギ・ヒノキの人工林化を押し進めながら他方では、熱帯雨林の乱伐

によって開発途上国の△自然と人間Vを収奪し、地球規模の環境問題を引き起こしている

外材の大量輸入によって国内の林業を不振に追い込んでいくというこの矛盾が山村の危機を醸成せしめるよすがとなつてい

る。外材のなかでもコマツガはスギの代替材として大量に輸入され、これがスギ

人工林型山村と雑木林型山村の高齢化と集落の状態

| 山村類型 | 項目 町村名 | 林野率 (1990年) | 民有林樹種別面積比 | | 高齢化の進行 | | 集落数 | 集落の状態 | | | |
|--------------|-----------|----------------|-----------|-------|--------|-------|-----|----------|-----------|----------|---------|
| | | | 針葉樹 | 広葉樹 | 1990年 | 2005年 | | 存続集落 | 準限界集落 | 限界集落 | 消滅集落 |
| 杉・楡の人工林型山村 | 池川町 | 95% | 82.1% | 17.9% | 35.7% | 53.0% | 43 | 8(18.6)% | 25(58.1)% | 9(20.9)% | 1(2.3)% |
| | 物部村 | 95 | 78.5 | 21.5 | 28.5 | 44.1 | 32 | 4(12.5) | 22(68.8) | 5(15.6) | 1(3.1) |
| | 大豊町 | 87 | 72.4 | 27.6 | 30.3 | 39.0 | 83 | 28(33.7) | 49(59.0) | 5(6.0) | 1(1.2) |
| | 仁淀村 | 88 | 71.6 | 28.5 | 26.8 | 47.8 | 63 | 27(42.9) | 26(41.3) | 9(14.3) | 1(1.6) |
| クヌギ・ナラ雑木林型山村 | 十和村 | 91 | 47.4 | 52.6 | 21.9 | 36.2 | 19 | 17(89.5) | 2(10.5) | | |
| | 西土佐村 | 91 | 58.9 | 41.1 | 21.7 | 33.8 | 31 | 27(87.1) | 4(12.9) | | |

材価格を長期低迷状況に追い込んでいく。いま、その一端を紹介しよう。池川町の安居溪谷上流から三五年生のスギの間伐材四八〇本ほどを八トン車二台に山積し、久万町の木材市場まで運搬、売却した杉材価格総額は二五万六三二五円。うち伐出費、運搬費等の経費が二万四七二〇円かかり、生産者の手元には二万一六一五円残るに過ぎない状態である。八トン車一台で一万円しか生産者に入らないところにスギ材不況の厳しさが端的に示されている。

六〇年代の高度経済成長期に若年労働力が大量流出し、加えて七〇年代から八〇年代にかけて外材圧迫による林業不振で挙家離村するものが急増し、残されたものが高齢化し、独居老人世帯が滞留する場と化した限界集落の増加をうながすところとなり現在に至っている。外材圧迫による林業不振が山の荒廃に拍車をかけ、スギ一色の森林モノカルチャーが山の自然環境を大きく後退させ人間と自然Vの貧困化を生んできている現状をみると、ブナ、クヌギ、ナラなどの広葉樹のもつ景観や保水力を見直し、雑木林型山村のもつ現代的意味を人間と自然Vの豊かさの実現に向けて再考していく必要性をここに指摘しておく。(高知大学人文学部教授)



第10回高知の映像コンテスト入賞作品

高知を撮る

池川町大野栄保橋 前田 嘉彦

その昔、二十歳を過ぎて「おとなしい、いい子」などと言われたら、気色がるかった。いまは大学の立派な(?)青年をとりえて、母親が「〇〇ちゃん、ほんとに可愛い、いい子ね」などという。これに対し、言う側も言われる側も、少しも違和感を抱いていない。当然として受け取っている。

母子関係が昔より親密になってきているといば聞こえがいいが、こつた親子関係を、どこかおかしと思っているものも、決して少なくない。かろう。『男子たるもの』などと、旧時代のな野暮を言うつもりはないが、こつた人達が、本当に精神的な自立をするのはいつなのかというところが気になる。

「うかつか三十、きよるきよる四十」といふことが言われる。二十歳を自処に成人の域に入り、そこでしっかり生涯の計画を樹て、いよいよ自立の人生に踏み出すことになる。だがその踏出しがきちんとできず、人間としての生き方があまいだつたりすると、三十、四十歳はす

幼態成熟

風俗歳時記



ぐきてしまい、分別のない三十歳代、不惑ならざる大迷いの四十歳になってしまふというのだ。人生五十の時代から、人生八十の時代になったから、昔に比べて少々自立が遅れてもどつこということはないかも知れない。だが人生には、幾つか年齢によって経験していかねばならない発達のための通過儀礼のようなものがあると思つ。卒直に言つて現代の若い人達には、大人になる訓練を殆ど受けなくて大人になっていると思われ者が、数多くいる。実際はそれほどないかも知れないが、そのように思えてしかたがない。人生をどう生きるかを、子供のときから、大人と同じように考えよとはいわれないが、誰もある日突然大人になれと言われても、なれるものではない。若い人達を非難するつもりはないが、精神的に少年期のままの大人というのは、波瀾の二十一世紀の主人公になることには疑問をもつ。(晋)

音楽の中の遊び心に魅かれて

吉田 典子

「スピーラン (spielen)」は、クラシック音楽の楽しさをピアノ曲を中心にもっと伝えたい、と集まった女性四人のグループです。現在一カ月に一回のペースで、奇数月の第二土曜日にコンサートを行っています。

メンバー四人とも幼い頃からピアノに親しみ、いつしかピアノの音色の魅力から離れられなくなりました。一見とりすました顔をしているクラシック音楽も、聴き手がある一つことに気づくとその本当の素顔を見せてくれます。楽譜は作曲家が創作したおもちゃの設計図で、演奏者は設計図を見ながら、音という部品を使って、音楽というおもちゃを製作しているのです。私たちは「音のおもちゃで遊ぶ」をモットーに、コンサートを創り上げていこうとしています。

コンサートの特色の一つとして、毎回テーマを持ってプログラムを選んでいきます。また演奏者自身が、プログラム曲目に自分なりの解説を付けて聴いていただいています。音楽の遊びのルールを解くお手伝いを、私たち「スピーラン」がで



旗揚げして三年若さを武器に

江野 慎次

「演劇集団S・T・H」は、平成四年三月に旗揚げし、この春で九三年を迎えます。稽古場を高知市青年センターにおき、ほぼ週三回のペースで活動しています。もともと高知追手前高校演劇部のOB、OGが中心になって結成された性格上、追手前高校演劇部のOB劇団だと誤解されがちでしたが現在ではそれ以外の仲間も増え、これまでに四回の公演を行ってきました。年齢的には十八歳から二十



五歳と比較的若手ばかりで構成しており、その意味においては「新進気鋭」、あるいは「世間知らずのお調子者」の集まりです。劇団の運営の仕方でも芝居のレベルもまだまだですが、その上演するテキストのテーマとしては、なるべく自分たちが今抱えている問題に近いものを選ぶようにしています。ですから、僕たちは今何が不満で何をしたいのかということに関し

その花の一番美しい瞬間を

片岡ゆかり

「ふしぎな花俱樂部」では、草花の自然な美しさを押し花にして残し、その押し花を使って額の絵や小物を作ることを科学的に追求し、それらの技術をますます高めるとともに、誰もが簡単に楽しめるよう単純化を追求しています。

押し花の楽しみは、草花を採集し、乾燥させて押し花にすることから始まり、それが楽しいのは、自然とより深く触れ合うためでしょうか。また、その押し花を使って物を作る最大の喜びは、長期間色の変わらない花絵額制作でしょう。その創作の喜びは感動的で、作品を発表するのも楽しいものです。



「おしゃべりがエネルギーのもとに」 一九八五年五月、県立図書館で穂岐山禮さんが「子どもの本のこと」という講演をされました。そのお話に感動し、もっと聞きたい、もっと語りたいと集まった仲間十数人でスタート。毎月一回、子どもの本はもちろん、演劇、映画、音楽、教育、環境、社会……を時を忘れて話しあいました。会員は三十代から六十代までの幅広い年齢層、職業も様々です。



散歩の途中で



正面の施設はデザインを意識した新しい公衆トイレ。その背後の高い建物は城西中学校、敷地の南端に残存する旧師範学校の脇門からのぞいた風景である。この写真では分からないが、大膳様公園には相当の樹齢の大木が多く、狭いながらもそれぞれの風格を備えてきている。

されれば幸いです。そしてもう一つの特徴はコンサートの中に「お楽しみコーナー」を設けている事です。聴き手に参加していただいで即興的にピアノ連弾を楽しんだり、他の楽器の演奏者にゲストに来ていただいたりして、クラシック音楽をさらに楽しんでいただくために、メンバーが工夫を凝らしています。肩のこらないクラシックコンサートです。ぜひ聴きにきて下さい！

て非常に敏感で、「それをさせられていいのではない。しているのだ」というところが重要な意味を持つのです。そして、「S・T・H」という集団は偶然にできたものだけれども、現在のその関係は必然としか呼びようがないこと。変わり続けること。それが僕たち、「演劇集団S・T・H」です。(P. S. 三月二十五日自由民権記念館にて公演を行います。是非御覧下さい) 連絡先 高知市北新田町一〇一―二四 三浦 光 電話 〇八八八―三三―七七七九三

のが見えてくるようになったようです。今、高知県内で、二十名の押し花インストラクターが活動しはじめました。花が好きで集まった人々が押し花の喜びをたくさんの人々に共に広げていきたいと考えています。高知市の生涯学習教室の一つがある昭和小学校で、昨年十一月より小さなサークル活動もはじまりました。一カ月に二回、必ず感動が広がるサークルです。 連絡先 ふしぎな花俱樂部 インストラクター 片岡ゆかり 電話 〇八八八―八三―一六七〇七

間、週一回「探険―子どもの本」と題して仲間が交代で書きました。現在は「探険―本海へ」というブックレットを年二回発行しています。二月に十一号を出したところですが、定例会は月末の土曜日午後になっていきますが、「探険」のための原稿だ、校正だと言っしょつちゅう集まっています。この会でのおしゃべりが、他の読書会や市民運動にも積極的に参加するエネルギーになっていきます。 連絡先 高知市中久万五三九 ホキ文庫 電話 〇八八八―二一―七六二一

風伯

半酔半醒記

○ 落日をのみこんだ西山は、あすの朝まで、どっしりしているだろう。―私は不眠症。
○ 風に訊くと、草木が好きだといった。にんげんは抗うからマイ、といった。じや、草木のどこがよいかと聞くと、そのままいるから好き、といった。
○ 傲慢な人。するい人。目立ちたがりた人。出しやばる人。人を利用する人。都合がわるいとソツボむく人。世話されても世話しない人。などなどの人。ある人は、悲しい人 可哀そう、といった。
○ 桃の木が枯れたあとへ、植えかえた
梅の木に実がなった。わたしが土に帰ったあとは、どんな風景が見えるだろう。
○ ねがわくは、いつも虚空に在るように、身過ぎ世過ぎしたい。たとえ天天下天風でも。
○ 旅、グルメ、不倫を料理してドラマをつくと、おいしいものがたべれる、オバケ・テレビ。
○ 数日本の黒いものが、数千万円に化けるオバケ・カメラ。
○ 赤いじゅうたんのうえで、さまざまなゼッケンをつけ、国民を踏みじって陣取り合戦の、チャンバラごっこをしているオバケ・政治屋。
○ かにかくに 高知のまちは恋しけれと云ってみたいが スカタンノまぢ といわれぬように ガンバリましょ。
(阿布痴)

高知市文化振興事業団創立10周年記念出版

土佐自由民権運動 日 録

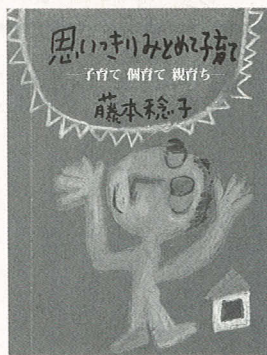
民権研究の
偉業、遂に刊行！

土佐自由民権研究会編
B5判・上製本・函入り 496頁
定価10,000円（税込）

1867(慶応3)年から1892(明治25)年までに、土佐で起こった自由民権運動・反民権運動のあらゆる出来事を資料・文献・新聞記事等から細大もらさず収録し、日付順に編成。そのすべての事項に出典を明記した。また巻末には、民権派の高知新聞・土陽新聞・高知自由新聞・江南新誌・土佐新聞、反民権派の高陽新報・弥生新聞・高知日報の論説・投書・雑録等の目録を年月日順に編成し、資料として付した。

民権運動に参加した無名の人々や結社、反民権派の動きなど、従来ほとんど顧みられなかった事項も数多く掘り起こされている。これにより、当時の土佐の日々の動きが手に取るように見えてくる。

土佐自由民権研究会が10年余の歳月を費やしてなった労作であり、自由民権運動研究のみならず、県市町村史・学校史等の研究や先祖の活動を知る上で最適の手引きとなる画期的な日録。



思いつきみとめて子育て

——子育て 個育て 親育ち——

藤本 稔子著 四六判・並製本・352頁・定価1,600円

三十八年の豊かな保育経験をもつ元園長がつづる
素顔の子どもたち。子どもを知り、愛し、認め、働
きかけをするなかで、どの子ども大きく伸びていく。